

**3 月 期**

〈出典一覧〉

国語 内田 樹 『生きづらさについて考える』  
国語 山口昌男 『笑いと逸脱』

毎日新聞社出版  
筑摩書房

問 8  
⑤ いずれはこの欄から、それぞれ収まるべき欄へ移されることになる。とあるが、それはどのような状態になった時か、その説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 26

- ア 未分類の本のどここの箇所を使うか、気にするかが整理され、その研究が終わった時
- イ 将来役に立ちそうだという予感により集められた本が読まれ、ある程度整理された時
- ウ 混沌とした状態にある本を、自分にとって必要、不必要という形で明確に分類できた時
- エ 一部が書庫代りの大学の研究室に運ばれ、読む価値のある本が何かを把握できた時
- オ 未分類の楽しい空間の本が整理されることで、知的好奇心を喚起しなくなった時

問 9  
⑥ 本を探したり、読んだりする行為はいつてみれば自分を確認するという行為の一部とあるが、本と向き合うことによって自分を解読できるのはどのようなときか、三十五字以内で説明しなさい。解答番号は 27

問 10  
本文の内容と一致するものには①を、一致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 28～32

- 28 『知的冒険のフィールド』は海外の異文化の地がより適しており、大都市、文明の中心地に限らずどこも充実している。
- 29 たいへん大きな書店でも、書店などあるべくもない地でも、将来のための徹底的な調査、情報の収集が可能である。
- 30 固形物としての本がなくても、訪れた先の文化そのもの、空気を『本』と考え、楽しむこともできる。
- 31 本が自分にとっての情報に転化するときは、原籍の依頼のように外部から偶発的にもたらされる場合もある。
- 32 買い集められた本は本棚に積まれていた期間が長いほど役に立ち、テーマに深まりを与えてくれるものである。

第三問  
次の問いに答えなさい。

問 1  
次の傍線部に相当する漢字を含むものを、それぞれ各群の A～E の中から一つずつ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 33～35

- 33 夕トウ性に欠ける判断
  - 34 カンメイを受けた本
  - 35 変貌を下げる銜並み
- ア 問題の夕カイ策を考える
  - イ 夕セイに流されずに生きる
  - ウ 川が大きく夕コウする
  - エ 賃上げ交渉が夕ケツする
  - ア 教訓を心にメイキする
  - イ 選挙の結果はジメイである
  - ウ 隣国とドウメイを結ぶ
  - エ 他人の主張にキョウメイする
  - ア スイチヨクな線を引く
  - イ 合理化をスイシンする
  - ウ 職務をスイコウする
  - エ 伝統文化がスイタイする

問 2  
次の文の空欄にはいるものを、A～E の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 36

グラウンドを縦横無  に駆け回る。

- A 人
- イ 尽
- ウ 仁
- エ 陣
- オ 迅

問 3  
次の中から「人口に膾炙する」の意味にもっとも近い語を選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 37

- A 美味
- イ 利益
- ウ 評判
- エ 幸運
- オ 偶然

こんな具合だから、蔵書はどのくらいあるか自分でもよくわからない。しかし、自宅の書庫兼用の書斎には、ある程度分類した状態でもあり、一部にまだ未分類の本があり、これは混沌とした状態で棚に並べられているのだが、これはまあ楽しみな空間でもある。家内にいわせると、この未分類の棚を覗いているときの私は血走っているのだが、それはともかく、いずれはこの棚から、それぞれ取まるべき棚へ移されることになる。そして、当分使いそうもないと判断した本は、自宅から大学の研究室に運ばれる。研究室を書庫代りに使っているようなものだ。

⑧ 本を戻したり、読んだりする行為はいつてみれば自分を解読するという行為の「副産物」だ。⑨ 的に、自分は何者であるのかを知りたいと欲していることの現れだと思ふ。私の知的冒険の旅は、これからはますます広がっていき、果てしないものなりそうだ。

(山口昌男『笑いと逸脱』)

問1 a・bの読みをひらがなで記しなさい。解答番号は a 16 b 17

16 漁って 17 琴線

問2 空欄 A から C にはいる語として、もっとも適切なものをそれぞれ次の中から選び、その記号をマークしなさい。ただし、一つの記号は一度しか使わないこととする。解答番号は A 18 B 19 C 20

A かしこし I したがって U とりわけ E もろろん O あるいは

問3 ① 本というものは、そのとき自分が研究していたり、あるいは関心を抱いている分野のものだけを買えばいいというものでない、とあるが、その理由としてもっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 21

- A 意識的な行為として本を買うことは自分の興味の範囲を狭めていくから
- I 穴場で見つける貴重な文献のようにその地でしか買えない本があるから
- ウ 将来具体的な形となつて自分の中に構築されるかも知れないテーマもあるから
- E フィールド・ワークで訪れる地のように書店がない場所もあるから
- オ 子感にもとづいて買い集めた本が確実に必要とされる時が訪れるから

問4 空欄 X には同じ語がはいる。それを漢字で記しなさい。解答番号は 22

問5 ② 情報はまだ書物の側にある、とはどういうことか、その説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 23

- A 書店や本棚に置かれている本のように、情報が理解される前の状態にあること
- I スタンダードな参考書のように、情報の価値が一般的に認められているものであること
- ウ 必要だとかねがね思っていた本のように、読む人があらかじめ求めている情報があること
- E テーマに関係のある箇所を引かれた本のように、情報が整理されていること
- オ 書庫にある程度分類した状態で取られている本のように、情報が把握された状態にあること

問6 ③ ワインのように長く寝かせておく、とあるが、同様の行為を示す比喩表現を本文中から十三字で抜き出し、はじめの三文字を記しなさい。解答番号は 24

問7 ④ シェイクスピアとあるが、その全集を翻訳し、小説論『小説神髓』、小説『当世書生気質』などでも知られる作家を次の中から二人選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 25

- A 山田美妙 I 坪内逍遙 U 夏目漱石 E 二葉亭四迷 O 尾崎紅葉

問 8 「反知性主義が劇的に暴動する」とあるが、それはどのようなことか、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 9

- ア 性差や人種に匹敵するほどに模倣や学舌が不可能である点で「一目見ればわかる」強固な指標が成立した
イ 従来の差別化指標に不満を抱いていた人たちが新たな指標の厳密さを熱狂的に支持し、思想的流行となった
ウ 物質化のための現実的条件が存在しないアイデアだったため、実現する前の思想の段階で人々の間に拡散した
エ このアイデアをきっかけに格付け制度でハイスコアをマークするための無駄な努力から解放されたいという潜在的な思いが噴出した
オ 外付けできない要因で格付けされることに対する本能的な拒絶感から、あまり考えられる間もなく反対運動が起こった

問 9 「自分を恐れさせるもの」とあるが、それはどのような存在のことか、本文中の語句を用いて二十字以内で説明しなさい。解答番号は 10

- 11 「反知性主義」の「反」は「知性」に反しているのではなく、「知性主義」に対する反発や怒りという意味とらえた方が問題のありかが見えやすい
12 筆者にとっては、「本物の知とは何か」という問いから始められていた原稿の依頼文自体が反知性主義的である
13 現在は文化資本で格付けされているが、今後は文化資本ではなく知性が格付け指標になるのではないかという不安が広がっている
14 自身を人工知能だと称した政治家に見られる、知性の格付けでハイスコアを得ねばという危機感、知性主義的思考の影響を受けている
15 知性の価値が高騰したのは、日本人の知性が劣化したわけではなく、賢愚の分布が変わったからである

第二問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

イギリス、オックスフォードに、ブラックウエルというたいへん大きな書店がある。私は海外に出たり、たとえばヨーロッパ滞在中とか、アメリカからの帰途に寄道して、この書店を訪れることがある。これは、ただ本を買うというだけのために訪れるのである。この書店では、美術の棚からはじめて音楽、レコード、古書、英文学、中南米文学、哲学、言語学、人類学といったように、すべての棚をなめるようにして本を漁っていく、そして、思いついたものは片端から買う。それは直感というより、予感に近いかもしれない。これは将来役に立ちそうだと感じたら、とにかく買ってしまおうのだ。

あるいは、一九七〇年のパリでは、古書店のリストを手に入れて、一軒一軒をしらみつぶしに訪ね歩いた。そして、

A 大量の本を買い込んだ。

本を探す場所は大都市、文明の中心地ばかりではない。思いもかけない場所でも思いもかけないものを見つけて出す喜びもある。たとえばナイジェリアでは大学がイギリスのシステムで運営されているが、ユニバーシティ・ブック・ショップへ行けばイギリスの本が多数並んでいる。ナイジェリアには、二度訪れているが、その際にはこのブック・ショップを大いに利用させてもらった。東インドネシアのチモール島に赴いたときには、一軒だけあった政府直営の書店でポルトガル語の本を多数手に入れた。チモール島はかつてポルトガル領であった。同じように、インドネシアのジョクジャカルタでは、露店でオランダ語の古書が売られていて安く手に入る。こうした行く先々で穴場を見つけるのも楽しみの一つだし、またそこ思わぬ貴重な文獻を見つけることもできるだろう。

かといって、私はいわゆる『活字中毒者』ではないから、専門分野の文化人類学フィールド・ワークで、書店などあるべくもない地を訪れ、何カ月も本と離れて暮らそうと一向に苦にならない。そのとき、私は固形物としての本ではなく、空気としての本を満喫しているのだ。訪れた先の文化そのものが『本』であると考え、むしろ積極的に本のない生活を楽しんでいく。こういうときは、B B C だの V O A だのといった各国の海外放送をカセットテープに録音し、繰返して聴いたりしているが、こうした土地では日本のように混信に悩まされることもないので、格好の楽しみになる。

本というものは、そのとき自分が研究していたり、あるいは興味を抱いている分野のものだけを買えばいいというものでもない。その時点では何の役にも立たなくても、B けっして目を通さずに本棚に積んでおくことになることも、将来自分がテーマにするかも知れないと漠然と感じている、いわば X 意識の縁に触れるものであれば、私はとにかく買ってしまいうことにしている。本を買おうという行為には、これはスタンダードな参考書だから持っていたほうがよい、これは必要だとかねがね思っていたものがそこにある、だから買う、という動機もあろう。それは、いつてみれば意識的な行為である。しかし、私の場合は自分が書店という『知的冒険のフィールド』に向き、そこを徹底的に調査し、情報を収集するのである。このときは情報はまだ書物の側にある。しかし、あるときこれが自分が自分についての情報に転化する時がやってくる。そのときのために、私は買い込んだ本を何年も、何十年も辛抱強くとっておくのだ。本はワインのように長く寝かせておくものであっていいし、私は考えている。そうして、寝かせておいたものは、内部からの衝動によってであるかもしれないし、C たまたまそのテーマについて原稿を依頼されたことが引き金となつてもかもしれないが、活性化し、X 的なテーマであったものが、具体的な形となつて自分の中に構築されていくことになる。そのとき、私はそれまでに集めた本を読みまくり、同時にある程度まで整理をしてしまう。黄色とだいたい色の二本のサインペンを持って読み進み、テーマに関係のある箇所を線を引き、「決定的に使いそうな箇所」にはだいたい色、「気にかけておいたほうがいいところ」には黄色で引くのである。

最近、ある雑誌に依頼されてシェイクスピア劇についての論文を書いた。シェイクスピアについてまとめた論文を書いたのは、実はこれが初めてである。シェイクスピアと出会ったのは学生時代のことだ。それ以来、私なりの観点で関連の書物をおりにふれ買い求めていた。その数はおよそ二百冊にも及ぶ。初めて買ったシェイクスピアの本は、二十七年間眠っていたことになる。他人から見れば「また山がおかしなことをやりだした」と思われるかもしれないが、種はずっと前から播いていたのである。

問2 「問題の解」ではなく、「問題のありか」を探り当てるためのツールだからとあるが、これはどのようなことか、本文の趣旨に即した説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は③

- ア 「反知性主義」が指すものは何かを明らかにするのではなく、「反知性主義」を掲げる人たちの主張の問題点を明らかにする
- イ 「反知性主義」に象徴される問題を解決する方法が得られるわけではないが、「反知性主義」に内在する問題が浮き彫りになる
- ウ 「反知性主義」を定義しないと議論ができないわけではないが、「反知性主義」の指示対象を問うことで本質的には何が問題なのかについて理解が深まる
- エ 「反知性主義」という語の意味を「意的に定義すること」で、「反知性主義」に拒絶反応を示す人々が何に抵抗しているかが明確になる
- オ 「反知性主義」の問題点を示すのではなく、「反知性主義」という用語法に対して非難する人々自身に問題があることを示す

問3 「資源」とあるが、ここの「資源」の具体的内容を示している部分を十二字以内で抜き出し、はじめの三文字を記しなさい。解答番号は④

- ア 差し迫って重要であること
- イ 突然対応が必要になること
- ウ 一時的に優先されること
- エ 失敗が許されない重圧があること
- オ 強固に関連付けられること

問4 喫緊<sup>③</sup>の意味として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は⑤

- ア 真の知が必要なのに、偽りの知ばかりが多く真の知になかなか巡り合えない
- イ 知の真偽が判定されるべきなのに、それを判定する方法が見当たらない
- ウ 根拠のない基準によって、ある種の知が偽りと認定され切り捨てられる
- エ 知をめぐる一つの価値観が広まり、それに共感できない少数派が取り残される
- オ 実用的な知だけが重視され、机上の知識や智慧が持つ意義が失われる

問6 「反知性主義者」たちが怒りをこめて「誤爆」している」とあるが、筆者は本文とは別の箇所「日本の場合、反知性主義者たちが主な攻撃の対象としているのはとりあえず大学である」と指摘している。反知性主義者たちの大学に対する姿勢を、筆者はどのようにとらえていると考えられるか、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は⑦

- ア 大学が学歴差別に加担していると思われていることだが、それは学歴を重視する人々の責任であって大学の罪ではない
- イ 大学の「知」が本物の知ではないと思われていることだが、その判断自体が本来できないことなので本質を見誤っている
- ウ 大学が示すべき「知」が欠落していると思われていることだが、どこまで追求してもその欠落感は解消できるものではない
- エ 大学が知性の査定をしているように思われていることだが、実際にはそのような査定をしていないので外的な批判である
- オ 大学による格付けは打破されるべきと思われていることだが、格付け制度に合わせて努力してきた自分自身も否定することになる

問7 文化資本<sup>⑤</sup>とあるが、文化資本が格付けに利用されるようになった理由の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は⑧

- ア 性差や人種といった格付け指標とは異なり、本人の努力により後天的に獲得できる可能性があったから
- イ 年収は従来の格付け指標と比べると外形的な分かりやすさに欠けるため、さらに所属階層を表象するものが求められたから
- ウ 階級差別の力学において、預金残高などの数値での格付けが否定され、よりとらえがたいものに社会的関心事が移ったから
- エ 近代以降、一目見ればわかるような外形的指標は社会に合わなくなり、生まれつきによらない指標が求められたから
- オ ビエール・ブルデューが階級差別の力学を研究したことにより、外形的ではないものも格付け指標になると気づかれたから

第一問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、\*の付いた語については、注を参照しなさい。

2015年に『日本の反知性主義』（亀文社）という編著を出したときに、タイトルだけ見て激しい拒絶反応を起こした人が少なからずいた。「あなたは『反知性主義』という語をどういう意味で用いているのか。まずキーワードを一言的に定義してから話を始める」と切り立てられて、閉口した。

「定義についていまだ合意のない語」について思量することは決して悪いことではない。むしろ、それは知性を活性化させるきわめて効果的な方法だと私は思っている。それは「問題の解」ではなく、「問題のありか」を探り出すためのツールだからである。

（中略）

有史以来、人類は、性差や肌の色や宗教や階級や資産など、さまざまな外形的な指標に基づいて他人を格付けし、それに基づいて、権利や自由や財貨や情報を傾斜配分してきた。格付け基準は歴史的・地理的条件によって変わった。何をもって人を格付けするかという問いは、誰かが政治的に決定できることではない。それは無意識のうちに集団的に行われる。

そして、近年のある時点で「知性の格付けをもつて資源分配の基準にしたらどうか」という理論がひろく行き渡るようになった。別に誰かが決めたわけではない。なんとなく、そういう流れが出て来たのである。

私での原稿を頼まれたときの依頼状は「本物の知とは何か」という問いから始められていた。机上の知識、智慧でなく、もって生き生きとしていて瑞々しく、生きる上で真に役に立つ有益な知見としての「知」。こそが、私たちには必要で、切に渴望しているのではないかと、という依頼の理由が記されていた。

こういう内輪の文書を公開するのは物書きとしてはルール違反のだが、ここには私たちの時代の知性観の一端が示されていると思われたので、非礼を顧みず引用させて頂くこととした。

ここには「知には真の知と偽りの知がある」という判断がまずあり、私はいわばその「判定者」として召喚されている。この

当否はどうかでもない。私たちがここから知れるのは、真の知と偽りの知を精密な査定基準にもとづいて差異化することが喫緊の課題であるという焦燥が存在し、かなり広範な共感を得ているということである。

私はずのような欠落感を「知性主義」と呼んだらどうかと思うのである。そうすると、問題の所在がいくぶんか明らかになる。「反知性主義者」たちが怒りをこめて「誤標」しているのは、知性そのものではなく、「知性主義」という名の格付け制度なのである。

もちろん繰り返し言うように、そんな格付け制度は実際にはどこにも存在しない。存在するのは、そのようなものが「なくては済まされない」という焦燥と欠落感だけである。けれども、いくたりかの人々の焦燥と欠落感だけで、反知性主義者たちがそこに「知性主義」の伽藍を幻視するためにはおそく十分なのである。

性差や人種や身分や宗教にもとづいて人々が差異化され、カテゴリーごとに資源分配率が決まっていた社会では、知性のようならえがたいものが格付けの指標に採用されることはなかった。性差や人種差が差別化指標として採用されてきたのは、「一目見ればわかる」からである。近代以後はひさしく「年収」が格付け指標に活用されたが、それも服装や乗っている車や住んでいる家を見ればわかった。ただ、人間は定期預金の残高を額にはりつけて歩き回るわけにはゆかない。年収を補充するものとして「文化資本」が格付け指標に採用された。

文化資本とはその人の所属階層を表象するもの（言葉づかい、マナー、教養など）のことである。ピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』（1979年）はその階層差別の力学を研究した書物だが、Distinctionというタイトルを「格付け」と訳せば、いつ頃から文化資本による格付けが私たちの社会の関心事になったかが窺える。

だが、テーブルマナーも、ワインについての鑑賞も、美術や音楽についての造詣も、後天的に学習しようと思えば、できる。金で買ったり、学習したり、模倣したり「外付け」することができる。そういうものはやはり格付け指標として厳密さを欠く。そう

考える人たちが出て来た。そのとき、性差や人種差に匹敵する模倣不能・学習不能の文化資本である知性が人間を差別化するとき、指標になるべきだ、というアイデアが生まれた。（中略）

もちろん、そのようなアイデアを物質化できる現実的条件は存在しない。けれども、「模倣不能・学習不能の文化資本である知性が差別化指標であるべきだ」というアイデアが誰かの脳裏をよぎっただけで、反知性主義が劇的に発動するには十分であった。既存の格付け制度の中でハイスコアをマークするためにどうふるまえば費用対効果がよいのかという計算はそれまで人生の知的努力のほとんどを投じてきた人々を浮足立たせるには十分であった。

反知性主義者がある時期から大量に登場してきたのは、別に日本人の知性が劣化したからではない。そうではなくて、一人ひとりの所有する知性の質によって人間は格付けされるのではないが、その査定権を自分たちの知らぬ誰かが、その権限の由来も明らかにしないままに独占しているのではないかと不安と恐怖が広がったせいである。それはAIが人間の知能を超える「シンギュラリティ」の切迫への凜然とした不安と恐怖とおそく同根のものである。

先般、ある政治家が自分の政策決定の適切性の根拠を問われて「人工知能である。つまり政策決定者である私である」という不可解な回答をしたことがメディアの話題になった。彼女は「私は人間ではなく人工知能」という非論理的な名乗りをしたわけだが、これは「知性の格付け」でハイスコアを得ることが政治的延命にとって死活的に重要なのではないかと「恐怖」がすでに権力者たちのうちに兆していることを教えてくれる。反知性主義はこの「恐怖」が「自分を恐れさせるもの」に対する憎悪として噴出したものである。

ある時代における知性の総量は変わらない。変わるのは、それがどの領域に偏るかだけだというのは村上春樹の至言である。私もこれに同意の一票を投じた。

人間の知性は時代が変わろうと、土地が変わろうと、実はたいして変わりはない。全員が知的に超越することもないし、全員

の知性が不調になることもない。どの時代でも、どの集団でも、賢愚の比率は変わらない。変わるのは賢愚の分布だけである。（内田樹「生きづらさについて考える」）

注

\* 権限………その行為を正当化する根拠。

\* シンギュラリティ……技術的特異点。ここではAIの能力が上がつていき、人間の知能を超える時点。

問1 a・bの読みをひらがなで記しなさい。解答番号は a 1 b 2

- 1 藪薺
2 兆し